

## 田代武四郎氏の訃音

元気象技師田代武四郎氏は、かねてより肝硬変症を患い自宅に於て療養中のところ、薬石その効なく昭和33年4月21日01時25分遂に永眠された。田代氏は明治18年5月1日の生れで、第74回の誕辰を目撃しながら不帰の客となられたことは誠に哀悼に堪えない。

田代氏は幼にして既に気象界に志し、明治33年私立岡山県味野測候所の技生に採用され、気象人としての第1歩を踏出し、明治38年7月岡山測候所技手に、大正2年6月中央気象台技手に任ぜられ、翌大正3年2月漢口領事館付として大陸に渡り、わが国天気予報の為の前哨観測の要衝に当ること約4ケ年、大正6年10月帰京して中央気象台雷雨掛を勤め、大正7年9月より爾来20ケ年を統計掛に於て全国気象月報及び各種気象年報の作製、気象要覧の編輯に従事して、歴大なる気象資料の記録と保存を司る重要な任務を担当する傍、品川崩れ台場跡（現東品川台場小学校）気象台官

舎に居住して、わが国暴風警報事業の創始と共に開設された、由緒ある品川信号所の業務を、故藤原咲平博士の大阪転出の後を承継いで維持されたのであるが、田代氏登庁中の留守の間に於て信号の揚げ下ろしに、毎日10時、14時2回の気象観測の遂行に内助された順夫人の功績も亦大なりと云うべきである。

昭和8年5月品川信号所構内に気象技術官養成所智明

寮の建設されるや、田代氏は品川観測所主任を兼ね生徒の観測の実地指導に、寮生活の起居の間の薫陶に寧日なき努力を払われたのである。

田代氏は昭和14年気象台技師に任ぜられ、小名浜測候所所長を歴て昭和15年12月津測候所所長に転じ、第2次大戦中の苛烈なる状況下に於て適切な宰領と人材の養成に

努められたのであるが、昭和21年3月終戦直後の混乱期に於て後進に道を開くべく退官された。それから後は昭和31年秋病臥されるまで事務嘱託又は事務員として、気象業務の事務方面に力を尽し、生涯を通じてわが国気象界の為に献身されたのである。

田代氏の気象統計に於ける功績は云わずもがなであるが、統計掛在任終期に執筆された“保養地の気候”及び“温泉地の気候”は前後5ケ年に亙り“天気と気候”誌上に掲載された異色のシリーズにして、殊に後者は全国各温泉地の気候を網羅した雄篇である。

惟うに田代武四郎氏は明治の末葉より大正、昭和の3代に亙り、日本気象事業の勃興—発展期に於て大いに貢献し、昭和19年5月高等官4等に昇叙、正6位勳5等瑞宝章を授けられたのであるが、時勢の大転換と共に晩年に於て恵まれなかつたことは御気の毒な次第である。田代氏の重厚なる人柄と真摯なる研究態度を景慕し、御冥福を祈って止まない。（星 為蔵記）